東北農林専門職大学総合プロジェクト

山形県立東北農林専門職大学（仮称）が令和6年4月に開学。舟形町では専門職大学と連携をすることが将来に向けて必要と考え、プロジェクトチームを結成し令和3年5月から活動しています。今回はその取組みを紹介します。

若者の転出超過

令和2年に実施された国勢調査では、舟形町の生産年齢人口（15～64歳）は、2,421人（人口総数比48.4％）と10年前の平成22年の2,985人（同比53.0％）と比べ減少しています。

また、社会増減の状況を年齢別に示している年齢別純移動数【グラフ1】を見ると「20～24歳」で大幅な転出超過となり、その世代の地元回帰が少ないことが読取れます。若者世代の減少の結果、令和3年の出生者数は17人という状況となっています。

若者の転出を抑えながら、UIJターンによる転入を増やしていく必要があります。

東北農林専門職大学が開学

そんな中、新庄市角沢に山形県立東北農林専門職大学が令和6年4月に開学することとなりました。

現在の山形県立農林大学校は「高度で実践的な農林業、地域資源の付加価値向上に向けた知識や技術を学ぶ2年制の学校」ですが、専門職大学は「山形県のみならず、東北を代表し、日本の農林業を牽引する高度人材を育成する4年制の学校」で農業系の専門職大学としては全国で2例目となります。

新庄最上地域では初の4年制大学で、農業経営学科と森林業経営学科があり、1学年40人定員です。5月4日に山形市で行われたオープンキャンパスには40人を超える若者が参加しました。

なお、農林大学校は令和6年4月以降、専門職大学の附属学校として存続します。

学長インタビュー
東北農林専門職大学
学長予定者　神山　修さん

日本の農業・森林業は、従事者の減少・高齢化やＤＸ（デジタル技術で「社会や生活の形を変える」こと）の進展、世界的な持続可能性への意識の高まりなど、これまでに例のない大きな変化の中にあります。

こうした中、優れた技術力と経営力で山形を起点に、農業・森林業の未来を切開いていく意欲ある若者をお待ちしています。

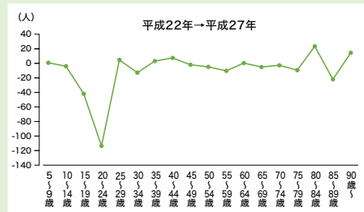
プロジェクトチームを町で結成

町では専門職大学と連携をすることが将来に向けて必要と考え、東北農林専門職大学総合プロジェクトチームを結成し、令和3年5月から活動しています。

メンバーは若手職員を中心に構成され、所属部署にとらわれず、横断的に参加し、それぞれの強みを活かしながら活動しています。

現在は、開学に向けた町の取組みを紹介するパンフレットやホームページの作成、オープンキャンパスへの参加や高校への訪問によるＰＲ活動を行なっているほか、研修も積極的に実施し、学生が求める支援のニーズ調査をしています。

【グラフ１】
年齢別純移動数（平成27年）



静岡研修を経て

プロジェクトチームでは、令和4年7月に全国で唯一の農業系専門職大学である静岡県立農林環境専門職大学に研修に赴きました。学生の中には、「農作物の海外への輸出」や「農業による環境問題の解決」などを仕事にしたいという学生もいました。

また、農業系高校の卒業者は全体の約26％で、実家が農家の方が少なく、農林業が若者世代から、ビジネスや職業として脚光を浴びているようです。

さらに、附属の短期大学部の学生は、卒業後は出身地に戻らず静岡県内の農業法人に就職することが多く、農業を就職先として選択しやすいようです。本町農業の発展を目指すためにも、そのような環境が必要と考えます。

オープンキャンパスへ参加

静岡県での貴重な研修

東北農林専門職大学総合プロジェクトチーム
若手職員インタビュー

舟形町健康福祉課
介護保険係
主事　池添　佳歩

今後、学生のみなさんに舟形町に住んでいただきながら、農業に関することはもちろんのこと、地域の方々とのつながりを持っていただきたいと思います。

町の各種イベントや活動を通して町の魅力を知ってもらい、できれば町に定住して農業に携わってもらえるように私たちも取組んでいきたいと思います。

また、最終的には地域の「担い手」として新しい視点で、農業のみならず町の発展のためにいろいろな場面で活躍していただき、舟形町の地域づくりにより良い影響を与えてくれることを期待しています。